



父の経営を引き継ぎ、黒毛和牛の繁殖（子牛を生ませて生後10ヶ月まで育てること）を手掛ける。夏の間は、出産間近な母牛だけを牛舎に残す。

とコンクリートを蹴り、群れは車道を挟んで反対側の森の中へ広がった。新しい餌場に移動した牛たちは、バリバリと音を立てて下草をうまさうに食べ始める。男は馬の背中から目を細めてその様子を見ている。ギャラリから拍手が巻き起こると、照れ臭そうに帽子を取って会釈をした。少し白髪の混じる髪が汗に濡れている。誰にも聞こえない小さな声で「僕の集大成だ」と言つて笑った。

これは佐々木基（はじめ）さん（28）が思い描く30年後の十和田市の風景だ。眼前に広がる谷には牛の姿はなく、小さな田んぼが並んでいる。田んぼは鬱蒼とした雑木林とか細い幹が目立つスギ林にぐるりと囲まれている。迫りくる木々が田んぼに影を落とし、イネの生育は悪い。しんと静まり返っていて人影はない。しかし彼は、この風景にびったりとトレス紙を載せたように一つひとつ、克明に未来を語つてみせた。「ここで牛を放したらどうなるかな、どんな景色になる

かなってそればかり考えてます」と笑った。

生きものたち

基さんはこの地で九代目の農家の長男として生まれた。祖父と父は会社勤めをしながら稲作をし、黒毛和牛を飼う兼業農家だった。家の裏には牛舎があり、庭には犬がいて、鶏がいて、羊がいて、イケスではニジマスとウグイが泳いでいた。夜になれば蛍が舞った。離れには馬もいて、常にたくさんの生きものに囲まれて育った。生まれたばかりの子犬を大切に育て、捕まえたトロンボを火で炙って遊んだ。干し草のロールの間に挟まってかくれんぼをしたり、いがぐりでゴルフをしたり。走り、転び、擦りむいて過ごした。小学校に上がる少し前、祖父が鶏を絞めるのを手伝った。祖父がナタを振り下ろすと、鶏は大きく羽をバタつかせ、鋭い鳴き声が出た。真っ赤な血が流れた。「鶏がかわいそうで、じいさんが悪い人に見えた」。



1.十和田の里山を眺める基さん。どんな風景にしたいか、想像が膨らむ。2.愛犬の「たお」。3.今年5月から飼い始めた羊。基さん相手に頭突き練習中。4.昔からいる鶏。

谷には小川が流れている。両側にはなだらかな丘が広がり、牛たちがのんびりと草を食べている。丘は明るく光を通す森に続いていて、木陰を求めて牛たちが森の中へ入っていく。木立の間の草を食べるもの、リラックスした様子で座り込むものもいる。この景色を望むレストランでは、まさにここで育てられた牛のステーキが運ばれてくる。大人たちはワインを片手に舌鼓を打ち、子どもたちは開け放たれた扉から放牧場へ駆け出していく。ピューイという口笛が響き、牛たちはもぞもぞと腰を上げる。馬に乗った男が現れた。男が牛の群れの最後尾につくと、牛たちははっつそつと谷を登り始めた。一頭がモアッと咆哮する。群れはひと塊になり、コンクリート敷きの車道にあふれていく。車を止め、この瞬間を待っていた観光客から感嘆の声が上がった。車窓から身を乗り出し、興奮気味にシャッターを切る。男は手綱を引き、素早く群れを囲むように馬を走らせる。牛の蹄がドタドタ